

Title	ゾラにおけるニヒリズムの超克：科学信仰から〈未知〉の畏敬へ
Sub Title	Le surpassement du nihilisme chez Zola : de la foi en la science au respect de l'«inconnu»
Author	林田, 愛 (Hayashida, Ai)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.43 (2006. 9) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゾラにおけるニヒリズムの超克

——科学信仰から〈未知〉の畏敬へ——¹⁾

林 田 愛

序

本論の目的は、『ルーゴン＝マッカール叢書』*Les Rougon-Macquart* (以下『叢書』と略記する) で示唆されながらも、『三都市』*Trois Villes* (*Lourdes, Rome, Paris* : 1894-1898) の最終作品『パリ』においてはじめて「静かな無神論」という言葉に凝縮されるエミール・ゾラ (1840-1902) の宗教観を、科学主義との関係において捉えることにある。20 世紀の哲学者 A. シュバイツァー (1875-1965) は、19 世紀にはじまった「倫理の貧弱化」を、精神的危機とみなし、近代人は自分が世界観喪失のなかにあるという事実の重大さに正しい感受性をもっていないとする²⁾。ゾラは『叢書』第 12 巻の『生きる喜び』*La Joie de vivre* (1884) の草稿準備メモに、「ペシミズムは 18 世紀の陽気な狂気のあとにくる、この時代の狂気である」³⁾ と記しているが、これはシュヴァイツァーの見解と同じように、時代の精神的危機を端的に示すものである。ゾラは進歩に無条件の信頼を置く 18 世紀の熱病的な楽観主義と同じように、進歩に疲弊した 19 世紀の悲観主義に社会病理の徴候を見たのだ。

近代の精神が機械文明に荒らされ、人間性を失っていくことに対し、ゾラは警告を発している。科学技術の進歩は伝統的なキリスト教的価値観を崩壊するだけでなく、自然を凌駕し、生命の神秘まで要素還元主義によって解き明かそうとした。もはや科学は人類の幸福に貢献するためにあるのではなく、科学自体が究極の目的となった。それは近代社会に精神のゆがみと人間疎外をもたらすが、こうした霊性の破産を経験した人々は多くの場合、無神

論やペシミズム、さらにニヒリズムの中に拘泥してゆくことになる⁴⁾。そしてニヒリズムは、西欧のキリスト教文化圏において絶対視されてきた宗教的価値観の崩壊と、科学主義の衰退が同時に生じた19世紀後半の精神的風土に大きく関わっている。以上のことを考慮した上で、通常対立項として考えられる宗教と科学、この二つに必要とされるものはゾラにとって何か、そしてニヒリズムを超越する真の宗教性とはゾラにとって何か、という問題に立ち入ってゆきたい。

I：科学知という「禁断の果实」

19世紀後半は技術面だけではなく自然科学や医学の面で、飛躍的發展を遂げた時代である。大衆消費社会の到来、鉄道建設、科学知発見の応用などに代表される進歩は同時代の人々にすべてが可能であるという幻想を抱かせた。このような風潮に対してゾラは、科学知を求める人間の飽くなき欲求、そして精神的な疲弊に対して痛烈な批判を行なっている。次に引用するのは、『わが憎悪』*Mes Haines* (1866) 所収の「文学と運動」からの抜粋である。

Qu'il me soit permis de parler d'un sujet qui intéresse toute notre génération d'esprits affolés et hystériques. Le corps, comme aux meilleurs temps de mysticisme, est singulièrement en déchéance chez nous. Ce n'est plus l'âme qu'on exalte, ce sont les nerfs, la matière cérébrale. La chaire est endolorie des secousses profondes et répétées que le cerveau imprime à tout l'organisme. *Nous sommes malades, cela est bien certain, malades de progrès.* Il y a hypertrophie du cerveau, les nerfs qui développent au détriment des muscles, et ces derniers, affaiblis et fiévreux, ne soutiennent plus la machine humaine. L'équilibre est rompu entre la matière et l'esprit. [...] Nous en sommes à l'âge des chemins de fer et des comédies haletantes, où le rire n'est souvent qu'une grimace d'angoisse, à l'âge du télégraphe électrique et des œuvres extrêmes, d'une réalité exacte et triste. *L'humanité glisse, prise de vertige, sur la pente raide de la science;*

*elle a mordu à la pomme et elle veut tout savoir*⁵⁾.

ゾラはここで、自分をも含めた同時代人を「進歩に病んでいる」とし、知的作業の増加による大脳の肥大化、神経系統の病を訴える。たしかに鉄道や電気通信の発展は人々の生活を豊かにしたが、その便利さが孕む危険性はその功利性をはるかに上回るものだった。極端な物質的進歩は、近代人の脆弱化と精神的消耗を招いたのだ。それは、当時ゾラとも面識のあったスピリチュアリストの神学者エルム・カロの批判といみじくも一致する。ゾラと同様に、カロは『現代道徳論』*Études morales sur le temps présent* (1869)のなかで、真の進歩は、何よりもまず、道徳生活の減少など、魂の頹廢がないところにある、としながら、鉄道や電気通信の発達と精神生活の頹廢を関係づけている⁶⁾。これまでゾラは、当時最新の遺伝理論を小説作品の中に取り込み、産業革命が産んだ鉄道やデパートの驚異を雄渾な筆致で描いたことから、実証主義者、科学主義者というイメージで捉えられることが多かった⁷⁾。その意味において、ゾラとカロのこの見解の一致は、ゾラの進歩思想を探る上で非常に重要である。

引用部分に再び戻ると、ゾラは文末尾に知恵の木の実の隠喩を用いているが、この隠喩はたいへん示唆に富んでいるといえる。旧約聖書において、イヴは「神のように善悪を知る者となる」という悪の誘惑に負けて木の実を食べ、アダムにもそれを食すことを勧めた。二人が神に比する知恵を得るという欲望を優先させたことによって、楽園を支配していた調和は崩れ、彼らは永遠にエデンの園を追われる。ゾラによれば、人類は「科学という急な坂の上で眩暈にとらわれずべる」、それでもなお「りんごをかじり、すべてを知ろうと欲する」のだ。人間は科学によって様々な事象を「知る」ことによって、環境を悪化させ、自分が作り出したスピード社会に消耗し脆弱な存在となった。そして、科学知によって神をも凌ごうとする人間の欲望には限りがない。

『三都市』では、一貫して主人公ピエール・フロマンの目から近代社会の腐敗が明るみになる。『ルルド』では、奇跡信仰を利用して再びその威信を発

揮しようとする教会の欺瞞と、その奇跡に熱病患者のようにすがる人間の病理が描かれ、『ローマ』ではさらに教会と聖職者の墮落が浮き彫りにされる。そして最終章の『パリ』では貧困と飢えによる阿鼻叫喚、その絶望の果てから生まれるアナキズムの潜伏活動が描かれるが、ピエールの兄であるギヨームもまた、アナキストとして庭の作業場で密かに爆弾の研究に従事していた。爆弾は科学の進歩が生み出したものであり、ゾラは瞬時に多くの生命を奪うことのできる科学的発明の恐ろしさをありありと描いている。同時に、『パリ』では街を行き交う馬車の暴力的側面にも注目せねばならない。ピエールは茫然としながら「この馬車たちはどこにいくのだ。」と自問自答し、耐えがたい「眩暈と息苦しさ」を感じる⁸⁾。『獣人』*La Bête humaine* (1890)のラストシーンでは、運転手を失った列車が真っ暗闇を怪物のように突き進むが、これは「プロシア戦争に突き進んでいくフランスの暗い未来」という従来の解釈ではなく、むしろ鉄道に代表されるスピード文明を前にした、鋭敏な知性をもつ人間の神経症的苦悩が象徴的に描かれていると見たい。この仮説を強化するのが、『ルルド』における列車と、『ローマ』における馬車の車輪の強迫的な回転である⁹⁾。

ゾラが『生きる歓び』の神経症的青年ラザールを「ペシミスト、歩み始めた科学の病人」¹⁰⁾と示唆しているように、科学主義と世紀末病としてのペシズムとの間には興味深い関係がある。後世において侮蔑的に「科学主義」と呼ばれる思想形態は、キリスト教に代わる「新しい宗教」として威信を放ちながらも、人になんら生きる為の道徳的指針を与えなかった。そして未知の恐怖を和らげることによって人々の信頼を得ようとした科学の無力は、人々の反感を一層強いものにした。多くの者がラザールのような病的ペシズムやニヒリズムに逃避した。そのような傾向のなかで最もゾラの心を悩ませたのが、彼自身が「死んだ宗教」*« la religion morte »*¹¹⁾と形容するカトリシズムへの回帰であり、この批判は知的発信源としてのエコール・ノルマルに向けられることになる。

II : エコール・ノルマル批判

ラザールは、科学主義者であったがために、化学実験の失敗や身内の死など、次々に科学の限界に直面することにより安易な科学否定からペシミズムに陥ったが、ここで注目すべきは、その病的ともいえるペシミズムの発信源の一つが、「エコール」であるとゾラが明記していることだ¹²⁾。ラザールやその学友達は病的に「科学を否定し、科学の決定的無益さ」を追求するしかない。ゾラのエコール・ノルマル批判は、『生きる喜び』から14年後に書かれた『パリ』で展開されることになる。ゾラはオピニオンリーダーとしてのエコール・ノルマルの欺瞞を暴きながら、科学主義の衰退とともに権力復興を企てる教会のドグマティズムに憤り、ネオ・カトリシズムや神秘主義の隆盛を弾劾する。ピエール・フロマンの目を通してフランス社会体の病が明るみになる。

La conversation était restée sur l'École.

«[...] Après n'avoir juré que par Voltaire, les voici retournés au spiritualisme, au mysticisme, la dernière mode de salons. Le dilettantisme, le cosmopolitisme s'en sont mêlés. Depuis que la foi solide en la science est devenue chose brutale, inélégante, ils croient se débarbouiller du professorat, en affectant un doute aimable, une ignorance voulue, une innocence apprise. Leur grande crainte est de sentir l'École, et ils sont très parisiens, ils risquent la culbute et l'argot, font des grâces de jeunes ours savants, dévorés du désir de plaire. De là, les flèches sarcastiques dont ils criblent la science, eux qui ont la prétention de tout savoir et qui retournent, par distinction, à la croyance des humbles, à l'idéalisme naïf et délicieux du petit Jésus de la crèche. »¹³⁾

引用箇所は、ピエール・フロマンがノルマリアンである甥のフランソワと散歩をしているときに、突然熱情に駆られてエコール批判をする場面である。

大きな精神的変動をみた 19 世紀末フランスにおいて科学主義への反発から科学を否定し、生半可なペシミズムやスピリチュアリズムを掲げる若者達は、ピエールにとって社会的病の「徴候」であり、社会を蝕む「破壊的な熱狂の伝染」でしかなかった¹⁴⁾。スピリチュアリズムが、近代科学の発達によって伝統的宗教の世界観から疎外された人々が生きる意味をみつけるために形成されたものであることを考慮すれば、科学と宗教の摩擦が引き起こす深刻な精神的危機の大きさが窺える。神秘主義の一派であり、後にルドルフ・シュタイナー（1861-1925）を中心としてヨーロッパに広がってゆく神智論もこのような精神的土壌のもとで生まれている¹⁵⁾。

フランソワはピエールに同意しながらも、たとえ同じノルマリアンでも文系の学生とは違い、自分達のような理系の学生は「確信に満ちた実証主義者であり、決定論者」であるがゆえに神秘主義に流されない明晰さをもつと語る。これに対してピエールは、そのような楽観的科学観こそ危険なものだと断言する。ラザールの神経症を、「事実と実験だけしか信じない実証主義者の病」¹⁶⁾とゾラが規定したように、ある人間が科学的思考に偏って徹底的に未知を排除しようとする、科学による挫折に直面したとき、精神の危機に瀕し、超自然的なものへの逃避を招く。ルルドにおける奇跡信仰もその歪んだ例の一つであるが、この時代における非合理的傾向の高まりが科学主義と深い関係にあることは興味深い。

そして科学主義と連動するのが、19 世紀末当時の高等教育の場における宗教の役割である。1848 年の 2 月革命以降、自由思想や世俗思想が強まり、実証哲学によって国の連帯感を強固にしようとの気運が高まる。実証主義は、カトリック教会の蒙昧主義から国を解放しようという提案を出し、〈新しい宗教〉という色を帯びるようになる。一方、エコール・ノルマルでは宗教色が濃くなり、実証哲学派とキリスト教派が教育の場を二分する。1870 年以降、とくに 1875 年から 1882 年の間は、ヴォルテールの理神論や、世俗化の波が再び押し寄せる。ところが一思想としての科学主義が終焉を迎えるとされる 1883 年以降、カトリシズムやスピリチュアリズムの空気が教育の場に浸透することになる。こうした思想の地殻変動にふりまわされた学生達は

何を信じてよいのかわからず、今日の歴史家が「意識の危機」と呼ぶ精神的打撃を受けた。そしてこの意識の危機を端的に示すのが、「教会がつむぎだすヒロイズム」に影響を受けてキリスト教回帰を行なった多くのノルマリアンであった¹⁷⁾。宗教史家は、信仰と理性の矛盾が生む精神的危機を次のように説明する。西洋における宗教と科学の関係を問うとき、科学の進歩にはキリスト教的世界観に対する反証が前提としてあるため、多くのキリスト教徒が科学と信仰の対立を意識してしか信者としての忠誠を保つことができない。その中で特に顕著だったのが、キリスト教徒のノルマリアンだったのである¹⁸⁾。

ゾラは宗教と科学に共通するドグマティズムに時代の病理を認め、警告を発した。ゾラの作品において作家の声を伝えるのが「良き」神父や医師であるならば、もうひとつの存在としての「哲学者」の存在を忘れてはならない。彼らは決して狭義の意味での哲学者ではなく、宗教に頼らずその叡智によって自己の救済を得ている人々であり、ゾラは『叢書』を経てようやく『パリ』でその最も崇高な表現にたどり着いた。それが「静かな無神論」である。

Ⅲ：「静かな無神論」：宗教と科学の融合

「静かな無神論」« *athéisme tranquille* » という語をゾラが初めて用いるのは『パリ』のメール・グランとマリーの人物描写を行なうときである。この語はゾラの宗教観を探る上で非常に重要な語であるが、これまで批評家の注意を喚起することはなかった¹⁹⁾。フランソワの父であり、ピエール・フロマンの兄ギヨームは、妻亡き後、残された子ども達を偉大なる母のごとく育てるこの義母を尊敬を込めてメール・グランと呼ぶ。その彼女と同じ資質をもつ若い娘が、ギヨームの家で家事手伝いをしているマリー・クートリエ、ギヨームの亡くなった親友の娘である。

Mais, demeurée seule, elle avait cessé d'elle-même toute pratique religieuse, révoltée dans son bon sens, n'ayant pas besoin de cette police morale pour être sage, trouvant au contraire l'absurde dangereux,

destructeur de la vraie santé. Comme Mère-Grand, elle en était arrivée à un *athéisme tranquille*, inconscient presque, non en raisonneuse, simplement en fille bien portante et brave, qui avait toujours été pauvre sans en souffrir, qui ne croyait qu'à la nécessité de l'effort, tenue debout par sa certitude du bonheur mis dans la joie de la vie moralement, vaillamment vécue, Et son bel équilibre lui avait toujours donné raison, l'avait toujours guidée, sauvée.²⁰⁾

このマリーの宗教観こそ、ゾラが『三都市』の最終作品で作り得た理想的人物のものである。どのように困難な状況でもつねに心の平安と静謐さを失わず、自己の内部に救いを見いだすことのできる人間、この「静かな無神論者」の雛型を、『叢書』のなかの登場人物に探し求めることができる。それは『生きる喜び』のポーリーヌ、カズノーヴ医師、オルトゥール神父であり、『ムーレ神父のあやまち』*La Faute de l'abbé Mouret* (1875) のジャンベルナ老人であり、また『パスカル博士』*Le Docteur Pascal* (1893) の博士もその例にもれない。彼ら全てに共通するのは、頑迷な実証主義者のように実証原理の外にある所与を否定したりはせず、神というよりは何か大きな存在、広大な未知の領域を無意識裡に認めていることである。ポーリーヌを例にあげれば、なぜ教会通いを止めたのかというラザールの問いに、彼女は満ち足りた様子で、「それはとても単純なことなの。告解には傷ついたけれど、他の女性達も私と同じだと思う……。」と答える。さらに続けて、「私にとって不条理だと思うことは信じることはできない。それだからこそ、受け止めるふりをして、嘘をつくことが何になるの。それに未知は私を不安にさせないし、論理的でないのよ。一番いいのは待つことだわ」と快活に言い切る²¹⁾。

未知なるものに対するポーリーヌの諦念、そこから派生する静かな幸福感は、マリーやメール・グランのものに通じる。ゾラの作品における宗教的儀式の放棄は、登場人物の知的成長を示しているが、その顕著な例を、『パスカル博士』のクロチルドにみることができる。クロチルドにとって、キリスト教的神秘主義への憧憬から、地上の生活へと唯一心をつなぎとめる役割を

果たしていたのが科学は絶対であるという信仰だった。だがある日、パスカル博士の「科学にも限界がある」という言葉が自分を裏切ったと感じたとき、クロチルドの精神は混乱した。その精神的危機は科学の限界に直面したときのラザールのものと一致する。そのようなクロチルドも、パスカル博士との愛の成就をきっかけに、ついにその教えを理解するに至る。クロチルドは、「私は科学を恐れていて、科学が地上にもたらした荒廃に対して苛立っていた。科学が発見したおそろしい傷跡から目を背けていたのだ。」と告白し、キリスト教の教義が自分の理性を麻痺させ、楽園信仰は「真実味のない幼稚なこと」でしかないと認めるに至る²²⁾。ついに彼女は、未知の世界の認識こそが地上での幸福を約束すると同時に、科学の未来についての新しい展望を与え得るということに気づいたのだ。そこに博士の言う「永遠の探究」がある²³⁾。ゾラにとって、19世紀後半に科学の破産論が湧き上がった背後には、科学に一足飛びの進歩を要求するという人間の傲慢な姿勢と、節度を欠いた科学信仰があった。ゾラにとってそのような人間は、科学に裏切られたという意識から、心の糧を再び「死んだ宗教」に求めるのだ。それは科学の破産を訴え、カトリシズム礼賛を行なったブリュヌティエールなどの知識人に代表されている。後年自らカトリックに改宗したブリュヌティエールの言葉には、新しい宗教という様相を帯びながらも、「神秘」を払拭することのできなかつた科学に対する憤りが如実に表れている²⁴⁾。

グラン・メールやポーリーヌ、そしてジャンベルナに通じるのは単なる不可知論的態度ではなく、自然への畏敬であり、未知への敬服、そして諦念から生まれる平和の境地である。「静かな無神論者」である彼らの静謐さにも見て取れるとおり、その幸福の本質を成すのは世の中に対しての無気力ではなく、最も困難な状況において生きることへの意志がもたらす静かな勝利なのである。ここで留意すべきは、これまでのゾラ研究では単に「汎神論的」と称される前述の老賢人ジャンベルナの死生観が、エルンスト・ルナン（1823-1892）の思想形成に大きな影響を与えた「真の賢人」のものと通じることである。『ムーレ神父のあやまち』（1875）がルナンの『幼年時代・青年時代の思い出』*Souvenirs d'enfance et de jeunesse*（1883）に先行

しているため、ジャンペルナのモデルがルナンの描く賢人ということはない。それ故になお、ゾラとルナン二人の思想の近似性が証明されるのである²⁵⁾。啓蒙書を愛読し、神とは「自然の秩序であり、内的理性」であるとし、「深い平安と誠実な謙虚さに身を忘れて、憎しみよりも憐れみをもって人の過ちをみる」、この老賢人の叡智こそ、ゾラにとってキリスト教に欠けているものであり、その欠如が悔悛者の目を地上から彼方へと、つまり楽園へと向けるものであった²⁶⁾。換言すれば、近代人の悲劇は、人間中心主義的ドグマティズムという点で共通するキリスト教と科学の二項対立に淵源する。それ故、「静かな無神論」という言葉は、宗教的な意味合いにおいてだけではなく、科学に対する人間の節度ある態度をも内包するということがわかる。人間存在の問題は人知を超えたところでしか答えられない。その認識は、正しい意志と知性、すなわち道徳と科学的思考が健全に結びついたときにはじめて可能となるだろう。そして「静かな無神論」にはさらに、ゾラという言葉でいう「生の信仰」という不可欠な要素がある。

そこで最後に、キリスト教のアンチテーゼとしての「生の信仰」がどのように提示されたのか、ゾラの描く聖フランシス像を中心に考察する。

Ⅳ：『ローマ』と聖フランシス：「生の信仰」

『ローマ』では、カトリシズムの未来についての理想論を展開した自著の発禁処分を受けたピエールが、時の教皇レオ 13 世に謁見するためにローマに赴く。彼がそこで目にしたのは、多額の寄付金によって私腹を肥やす高聖職者の醜さと、教会と深く結びついた貴族社会の放縱と頹廢、救いさえ見出すことのできない下層社会の人々の絶望であった。最後の希望をもって謁見した法王レオン 13 世にも、ピエールは象牙の塔に君臨し他を睥睨する者の狡猾さと、慈悲の言葉に隠された弱者への冷淡さしか見いだすことができなかった。この謁見の場面には、ゾラが『叢書』シリーズから問いつづけてきた、宗教のあり方とは何か、そして真の宗教性とは何か、という究極の問題に答えが出されているといえる。ピエールの目に映るレオン 13 世は権威主義の象徴であり、ローマは「断じて、イエスの街ではなかった」²⁷⁾。ロー

マはもはや聖なる地ではなく、教会は砂の城であり、その廢墟に残るのは聖職者の欺瞞と貧しい人々の悲惨な生活だけだったのだ。

そのような中、渴ききったピエールの心をうるおすのが、アッシジの聖フランシス（1181-1226）の存在である。ピエールは彼自身が「魂の洗濯者」²⁸⁾と形容する、貧しく純朴な聖フランシス会の修道院長に深い感銘を受けたのをきっかけに、その夜遅くまで聖フランシスに思いを馳せることになる。

Ce jour-là, la figure de l'amant ingénu de la Pauvreté, du délicieux François, comme disait Narcisse Habert, le hanta jusqu'au soir. Souvent il s'était donné de la venue de ce nouveau Jésus, si doux aux hommes, aux bêtes et aux choses, le cœur enflammé d'un si brûlante clarté pour les misérables, dans cette Italie égoïsme et de jouissance, où la joie de la beauté est seule restée reine. Sans doute les temps sont changés, et quelle sève d'amour il a fallu, aux temps anciens, pendant les grandes souffrances du Moyen Age, pour qu'un tel consolateur des humbles, poussé du sol populaire, se mît à prêcher le don de soi-même aux autres, le renoncement aux richesses, l'horreur de la force brutale, l'égalité et l'obéissance qui devaient assurer la paix du monde²⁹⁾.

「新しいイエス」からはじまるピエールのフランシス像からは、野蛮な時代の中でも、人間だけではなくあらゆる生命、自然全体にその愛を広げた、一人の聖人の姿が浮かび上がる。貧困を根本信条とし、学問神学に対して嫌悪の念を感じていた聖フランシスと、ピエールの掲げる宗教的な理想像が重なる。ピエールにとってはフランシスこそが、パリサイ人の教会主義に反抗し続けたイエスその人の清廉さを受継ぐ者なのだ。「小鳥への説教」で知られる伝説としてのフランシスを歴史的人物として捉えなおし、近代のフランシス像を決定的にした著として、ポール・サバティエの『アッシジの聖フランシスの生涯』（1894）が挙げられる³⁰⁾。ゾラがこの著を読んでいたと想像

するのは早急であるとしても、『ローマ』出版の年である1898年を考慮すれば、実証的研究の対象となった人間フランシスの思想に共鳴を受けたと考えることは可能である。反教権主義者でありながら、キリスト教の素朴な信仰には好意をもちつづけたゾラが、フランシスに惹かれるのは自然なことであろう。興味深いことに、ルナンはフランシス派の信条を仏教の教えと比較しているが、19世紀後半におけるフランシス像と思想史との関係については今後の研究課題としたい³¹⁾。

ここで、ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)の『ペーター・カーメンツィント』*Peter Camenzind*(1904)においても、聖フランシスが苦悩する青年の心に理想像として描かれることに着目したい。田舎から都会に出て、様々な挫折や苦悩に直面しながらも文筆業で生計を立てるようになった主人公ペーターは、聖フランシス派の人々の生活を執筆するための材料集めと称して、ある日イタリアへ旅立つ。ペーターの目には、ウンブリアの美しい自然が映る。そこでその自然に対する人間の愚かさがありありと心に浮かぶ。ペーターによると、多くの人は、「自然を愛する」と言う。自分たちを「自然の冠」と信じる人間達は、外へ出て、大地の美しさを喜び、牧草地をふみにじり、ついにはたくさんの花や枝をもぎとる。そして自分の心の広さに感動するのだ³²⁾。フランシスに靈感を受けた帰国後のペーターは、「生きとし生けるあらゆるものの権利と不滅性との絶対的な確信」を読者に想起させる作品を世に送り出したいと切実に願う³³⁾。ペーターの自然観と、前述した「静かな無神論者」であるジャンベルナ老人の姪、アルビーヌの言葉が重なる。アルビーヌは、自分を捨てて教会への忠誠を選んだムーレ神父にたいしてこう訴える。「生とは草であり、木であり、水であり、太陽でしょう。」そして、ジャンベルナから教会に行くことを禁じられていると言いながら、「私は卵をさわらずに巣をながめたり、植物を傷つけるのがこわくて花一輪手折ったことはなかった。虫一匹も手にとって苦しめたことはなかったのよ。」と叫ぶ。アルビーヌにとって自然や動物との完全な調和は、生そのものであった。命を宿す卵や、小さな虫たち、そして花一輪にいたるまで傷つけないように細心の注意を払うこと、道徳原理ともいえる姿勢を貫いてきたアルビ

一ヌの、「それでも神は怒るといふの」³⁴⁾という訴えには、キリスト教の教条主義への痛烈な批判と、生命への畏敬ともいえる倫理観が明確に現れている。ゾラは特に、自然や動物を人間よりも下位のものとして貶めたにもかかわらず、司祭職の独身制度をはじめとしたカトリシズムの頑迷さに批判の矛先を向けた。ジャンペルナの宗教観がキリスト教に倫理面で立ち勝っていることは否定できない。ゾラとヘッセ、異なる国に生き世代も違う二人の作家が聖フランシスを宗教的理想像としながら、文明社会の病に自然美を対立させていることは意義深い。

ゾラはキリスト教の信者であること自体を責めているのではない。そればかりか、単純な道德のレベルに昇華され、日々の生活に還元されている信仰には好意的である。『愛の一ページ』 *Une page d'amour* (1878) のユベール夫妻のように「単純に教会の掟を守り」、「貧しい人々の静かな信仰」を享受している人物がよい例である³⁵⁾。教義を盲信することは、「高揚した死における永遠の幸福の約束」にすぎることであり、「生命の抹殺行為」でしかなかった³⁶⁾。ゾラは『パスカル博士』の準備メモに、「生の信仰こそが、神の啓示である。生が神なのだ。」³⁷⁾と記しているが、この生の信仰こそ、ピエール・フロマンが長い葛藤を経た後、マリーへの愛によってついに到達したものなのである。ルルド、ローマ、パリという3都市を通じて重くのしかかっていたピエールの苦悩は、マリーと出かけた郊外での自然との完全な一体感の中であとかたもなく消え去る³⁸⁾。人知を超えた偉大な自然との完全な調和が、これまで堂々と認めることのできなかつたカトリシズムの大罪、死後の幸福を約束することによって地上の幸福から人間を引き離していたその罪をピエールに実感させることになった。ルルドの群集の前にピエールが叫んだ、「人類を苛むこの彼岸への抑えがたい欲求は何なのだ。」³⁹⁾という問いへの答えが、生そのものを受け止める行為のなかについに見出されたのだ。

〈未知〉を謙虚に認めること、それはゾラの宗教観においては死後の世界、科学観においては生と死の神秘であるならば、ゾラの提示する〈未知の認識〉がいかに〈今生きる生〉を尊びニヒリズムを超克する「生の哲学」であるのかが分かる。そしてその哲学が実践する生命への畏敬は、個人の生だけ

ではなく生命全般に広げられたものであった。

結論

19世紀末は急激な科学的進歩の時代としてだけではなく、科学に対する絶望感から、カトリックに改宗する者が多くいたことを忘れてはならない。ルルドの巡礼も含めて、ゾラは科学主義社会が生んだ非合理的なものへの回帰を危惧したのだといえる。ニーチェ（1844-1900）もまた、ゾラと同じようにキリスト教的〈此岸〉と〈彼岸〉の対立を不条理なものとして弾劾し、この二項対立には病的または〈退廃的な〉意志のみしか含まれていないとする。そしてその意志は、病的想像が生み出す純粋なフィクション（死後の樂園）によって今まさに生きんとする個人の〈生〉を否定するものでしかない⁴⁰。そして科学によって教化された文化が「非論理的」になったとき、すなわち自己が生み出した結果の前でたじろいだ瞬間に、その文化は永遠に衰退する運命にあるのだ⁴¹。あらゆる非合理を否定する科学主義それ自体が、パシミズムからの逃避であり、ニヒリズムの萌芽を孕んでいたのだといえる。

ゾラはこのような時代において、人間性を価値の根拠と戴く新しい宗教を模索した。同時代の精心的危機は、むしろ本来的に宗教的な生き方が見失われていったという点にある。近代人の真の不幸は、科学を宗教としながらも、そこに道徳的価値観を付与しようとしなかったことにあるのだ。物質的進歩にとらわれて精神的進歩を見失った結果、「科学の破産論」にみられる浅はかな価値観の転倒が行なわれた。「生の信仰」と同義語である「静かな無神論」に示される生き方とは、宗教に頼るのではなく、与えられた生を十全に生き抜くことである。道徳的でありながらも宗教を必要としない強い精神力をもつことによって、投げやりなニヒリズムやデカダンスから生じる科学知の全否定などという愚かな結論に至ることはない。ゾラにとって、〈未知〉＝〈不可能〉についての意識が、科学についての新しい展望を与え得るのだ。『学生達への訓示』*Le Discours aux Étudiants*（1893）でゾラは若者達に次のように問う。「科学は幸福を約束しただろうか。わたしはそうは思わない。科学は真実を約束したのであり、真実が人間を幸福にするか否かというのが

問題なのだ。」宗教が約束した彼岸の科学による否定がどれほど多くの人々を絶望の淵に沈め、その科学の無力がさらに大きな精神的混乱を招いたか。

ゾラにとって、科学が開陳する真実を受け止めるには、確かな「自己否定」と「ストイシズム」が必要である⁴²⁾。この二つの性質こそ、ゾラの科学観と宗教観に通底する重要な要素であると同時に、これまで論じてきたゾラの「静かな無神論者」に通じるものである。そしてその根幹を成すのが、生命への畏敬であり、内に深い宗教性を宿していることを忘れてはならない。ゾラは科学主義とキリスト教の破産が招いた病弊を癒すには、真の宗教性と科学の融合による新しい宗教しかないと考えた。このゾラ思想こそ、「あらゆる宗教は跡形も無く消え去り、宗教的感情が科学と共に新しい宗教を創るのだ。」⁴³⁾というピエールの叫びのなかに凝縮していると言えるだろう。

註

- 1) 本論考は、2005年5月27日、フランス自然主義文学研究会（於慶應義塾大学三田キャンパス）での口頭発表の内容に大幅な加筆を行い、新たに第四章（『ローマ』と聖フランシス：「生の信仰」）を併せたものである。
- 2) A. シュヴァイツァー『文化と倫理』水上英廣訳、シュヴァイツァー著作集7、白水社、1975、p. 41.
- 3) BNF, Manuscripts, NAF10311, f° 260.
- 4) 側瀬登によれば、ニーチェはベシミズムとニヒリズムを区別して、「ニヒリズムの先行形式としてのベシミズム」という。そして、このニヒリズムという最高価値喪失に至らないベシミズムに二つの区分をする。その一つは、強さとしてのベシミズムでアナーキズムの論理の強さなどにみられ、二つ目は衰退としてのベシミズムである。このベシミズムがニヒリズムに至るのは無価値性が価値の支持原理を否定するところにある（側瀬登『ニーチェのニヒリズムと超人』、驢馬出版、2000、pp. 89-90.）。
- 5) « La littérature et la gymnastique », *Mes Haines* (1866), *Œuvres critiques [O.C.] I dans Œuvres complètes*, sous la direction d'Henri Mitterand, Cercle du Livre précieux, 1966-70, X, p. 56. (強調は引用者)
- 6) « Pour qu'il ait progrès véritable, il faut avant tout, qu'il n'y ait pas déchéance de l'âme, diminution de la vie morale. Or nous aurions beau avoir moitié plus de chemin de fer et de télégraphes électriques, cela n'empêcherait pas qu'il eût dans l'existence de l'humanité une irrécusable

décadence, si par hasard le niveau de la dignité humaine avait blessé. »
Élme Caro, *Études morales sur le temps présent*, Librairie de L. Hachette
et Cie, 1869, p. 57.

- 7) 例えば、クリストフ・シャルルはゾラを「科学主義作家」« le romancier scientifique » と定義する。(Christophe Charles, « Zola et l'Histoire » in *Zola et les historiens*, Bibliothèque nationale de France, 2004, p. 15)
- 8) Émile Zola, *Les Trois Villes*. Paris, édition établie par Henri Mitterand, Stock, 1998, p. 110.
- 9) *Ibid.*, p. 61, *Rome*, p. 375. 一方でゾラはピエールの甥であり、「次の流行を担う自動車」の修理工トマの姿を生き生きと描いている (*Paris*, p. 415)。産業化社会における知識人の苦悩は、夏目漱石の『行人』(1914年)にもみられる。「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まることを許してくれた事がない。徒歩から俵、俵から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、どこまで行っても休ませてくれない。どこまで伴れて行かれるか分からない。実に恐ろしい。」(夏目漱石『行人』、岩波書店、2003年、354頁)という一郎の台詞には、急激な物質的進歩に耐えられず分裂した近代人の自我を認めることができる。
- 10) « un pessimiste, un malade de nos sciences commençantes » NAF10311, folios 172-173.
- 11) 『三都市』シリーズでは « la religion morte » という表現が頻出するが、これはカトリシズムをはじめ、ネオ・スピリチュアリズムなどあらゆる神秘主義的傾向を指したものであろう。
- 12) « C'était, dans la paix de l'hiver, au fond de ce trou perdu de Bonneville, comme un réveil de ses anciennes relations de Paris, de ses lectures, de ses discussions entre camarades d'École. Le pessimisme avait passé par là, un pessimisme mal digéré, dont il ne restait que les boutades de génie, la grande poésie noire de Schopenhauer. » Émile Zola, *La Joie de vivre, Les Rougon-Macquart*, édition établie par Henri Mitterand, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 5 vol., 1960-1967, t. III, p. 883. (強調は引用者)
- 13) *Paris*, pp. 169-170.
- 14) *Ibid.*, p. 173.
- 15) « Cette société [Société théosophique] est bien jeune; elle a déjà pourtant une histoire. Elle fut fondée en 1875, à New-York, par un très petit groupe de personnes, inquiètes de la rapide décadence de idées morales

dans l'âge présent », Émile Burnouf, « Le Bouddhisme en Occident » in *Revue des Deux Mondes*, 1888, p. 368. ユイスマンスも、『彼方』で神智論について言及している。(Huysmans, *Là-bas*, Gallimard, 1985 [1^{re} éd., 1889], p.165.)

- 16) *La Joie de vivre*, t. III, p. 999.
- 17) « Ainsi, quand à partir de 1883, le scientisme est battu en brèche et que se multiplient les signes d'un *aggionamento* de l'Église. (les cercles ouvriers, la création de l'A.C.J.F., la montée de Sillon et la querelle du Modernisme), les élèves des lycées et collèges ne restent pas insensibles à ce nouveau visage de l'Église. [...]À l'École normale, le tiers des promotions est composé de « talas ». Bergson définit la jeune comme « plus hardie, plus audacieuse, plus consciente de ses responsabilités ». Devant l'effondrement du matérialisme et des valeurs scientistes, une conclusion s'impose, affirment les correspondants d'Agathon : « toutes les morales indépendantes ont échoué là où celle de l'Église reste souverainement efficace et créatrice perpétuelle d'héroïsme... », Paul Gerbod, *Dans les lycées et collèges au XIXe siècle*, Hachette, 1968, p. 228.
- 18) René Rémond, *Le Christianisme en accusation*, Desclée de Brouwer, 2000, p. 17.
- 19) Pierre Ouvrard の *Zola et le prêtre* (Beauchesne, 1986) や、Sophie Guermès の *La Religion de Zola: Naturalisme et déchristianisation* (Honoré Champion Éditeur, 2003) など、ゾラの宗教観を体系的に扱った論文でもふれられていない。
- 20) *Paris*, pp. 140-141. (強調は引用者)
- 21) *La Joie de vivre*, t. III, pp. 140-141.
- 22) *Le Docteur Pascal*, t. V, p. 1062.
- 23) *La Joie de vivre*, t. III, pp. 1211-1212.
- 24) Ferdinand Brunetière, « Après une visite au Vatican » in *Revue des Deux Mondes*, 1^{re} janvier, 1895, p. 99. プレイヤッド版の「エチュード」によると、クロチルドが科学に対して抱くヒステリックな不信感は、『両世界評論』におよそ 20 年にわたり掲載されたブリュンチエールの記事の一部を反映しているものであり、パスカル博士の答えはゾラ自身のものであるという (*Le Docteur Pascal*, t. V, pp. 1642-1643.) 1888 年頃カトリックに改宗したブリュンチエールは、破産した科学に代わるカトリシズムの威光を称えるとともに、科学に依拠してきた自然主義の終焉を唱える。

- 25) ゴラが『パスカル博士』を構成する際にルナンの『科学の未来』*L'Avenir de la Science* (1890) に準拠したのは周知の事実である。だがこれまでのゴラ研究では、パスカル博士の「静謐な」科学観のモデルが、科学主義者とされるルナンのものであるという矛盾に関して追求されることが無かった。『若者達への手紙』*La Lettre à la Jeunesse* (1879) でルナンの科学に対する楽観主義的態度を「逆上した夢想家」として批判したゴラが、実は『科学の未来』の中に〈未知〉に対する謙虚な科学観を読み取っていたのだ。1848年に脱稿されたが出版は1890年である『科学の未来』では、未知の超克に挑む際の「畏敬」の念が語られている。「[...] toujours, en face de l'inconnu, l'homme ressent un double sentiment : respect pour le mystère, noble témérité qui la porte déchirer le voile pour connaître ce qui au-delà. » Ernest Renan, *L'Avenir de la science*, Garnier-Flammarion, 1995 (1^{re} éd., 1890), p. 90. ルナンの科学観を形成する〈未知への畏敬〉が、その宗教観にも通じていることは疑うべくもない。
- 26) « Naturellement je partageais cette horreur, et c'est bien plus tard, quand mes idées philosophiques se furent assises, que je songeai que j'avais eu le bonheur dans mon enfance de voir un véritable sage. Ses idées, je reconstruisis sans peine en rapprochant quelques mots qui m'avaient paru autrefois inintelligibles, et dont je me souvenais. Dieu était pour lui l'ordre de la nature, la raison intime des choses. [...] Loin de méconnaître Dieu, il avait honte pour ceux qui s'imaginent le toucher. Perdu dans une paix profonde et une sincère humilité, il voyait les erreurs des hommes avec plus de pitié que de haine. Il était évident qu'il méprisait son siècle. La naissance de la superstition qu'il avait crue enterrée par Voltaire et Rousseau, lui semblait, dans la génération nouvelle, le signe d'un complet abêtissement. » Ernest Renan, *Souvenirs d'enfance et de jeunesse*, Calmann-Lévy, 1883, p. 1251.
- 27) *Rome*, p. 347.
- 28) *Ibid.*, p. 432.
- 29) *Ibid.*, pp. 342-343.
- 30) 下村寅太郎『アッシシの聖フランシス』、南窓社、1965年、p. 19.
- 31) Ernest Renan, *Le Bouddhisme*, Lume, 2004, p. 152. *Le Bouddhisme* を構成する二つの論考（「Premiers travaux sur le bouddhisme」、「Nouveaux travaux sur le bouddhisme」）は、*Nouvelles études d'histoire religieuse* (1884) に収録されている。

- 32) 本論では次の仏語訳に依拠した。Hermann Hesse, *Peter Camenzind*, récit traduit de l'allemand par Fernand Delmas, Calmann-Lévy, pp. 131-132.
- 33) *Ibid.*, p. 159.
- 34) *La Faute de l'abbé Mouret*, t. I, p. 1252.
- 35) *Le Rêve*, t. IV, p. 836.
- 36) *Paris*, p. 170.
- 37) *Le Docteur Pascal*, NAF10290, f° 230.
- 38) *Paris*, pp. 336-337.
- 39) *Lourdes*, p. 336.
- 40) Luc Ferry, *Le Nouvel ordre écologique*, Grasset, 1992, p. 163.
- 41) F. Nietzsche, *La Naissance de la tragédie*, Denoël, 1964, p. 112.
- 42) *Le Docteur Pascal*, t. V, p. 1613. 『学生たちへの訓示』は Maurice Le Blond によって *Mélanges, Préfaces et Discours* (Bernouard, 1929) 所収で出版されており、ミトランが『パスカル博士』の「エチュード」に転載している。
- 43) *Rome*, p. 49.